

第56回全国トラックドライバー・コンテスト 千葉県代表の山野邊繁さん(日通千葉貨物運送株)が11トン部門日本一に!

昨年10月26日・27日に開催された「第56回全国トラックドライバー・コンテスト」(主催:全日本トラック協会)で千葉県代表として出場した山野邊繁さん(日通千葉貨物運送株西浜事業所)が、11トン部門優勝を果たした。

そこで、今回は「会社訪問特別編」として、山野邊さんにインタビュー。11トン部門日本一に輝いた、山野邊さんの喜びの声をお届けする。



2度目の全国大会挑戦で、見事部門優勝の栄冠を勝ち取った山野邊さん

■「再び出場し、必ず結果を残す」 強い決意で臨んだ2回目の全国大会で栄冠勝ち取る

山野邊繁さんは、日通千葉貨物運送株に12年ほど前に入社し、現在41歳である。山野邊さんは幼い頃から自動車やオートバイを運転することに憧れを抱き、16歳の時に「将来は運転の仕事をしたい」と決心し、原付免許を取得。高等学校卒業後は運送会社に就職し、トラックドライバーとしてのキャリアをスタートさせた。「いつかは大型トラックに乗務したい」と考えていた山野邊さんは、21歳の時に大型自動車運転免許を取得すると、大型トラックのドライバーとして活躍の幅を広げた。

29歳の時に現在の会社に入社してから5年ほどは、営業所に大型トラックの配置がなかったこともあって、山野邊さんは3トン冷凍冷蔵車に乗務していた。入社5年後に再び大型トラックに乗務するようになり、山野邊さんは「大型トラックに再び乗務できる」という喜びとともに、徐々に大型トラックに乗ったこともあって車体の大きさを改めて感じたという。

「大型トラックは車体が大きく、運転席も高い位置にあるため、死角が発生しやすくなります。また、車両の重量もあり、ひとたび事故を引き起こしてしまうと命に関わる大事故に繋がりがやすいため、常に事故防止への意識を高めながら、安全確認を徹底するとともに、安全性の高い運転操作を心がけています」(山野邊さん)

山野邊さんは現在、大型トラックに乗務し、雑貨全般を輸送する業務を担当している。現在は千葉県内の事業所間輸送が中心で、朝5時に出勤し、車両の日常点検や乗務前点呼を経た上で6時過ぎに営業所を出発。県内での輸送に従事し、夕方5時頃には退勤している。

「当社に入社して12年ほどが経ちましたが、社内の人間関係が良好で、先輩ドライバーや後輩ドライバーとも気軽に話し合える関係が構築されています。今の会社は自分にとって職場環境が合っ

ていると感じており、今後も引き続き当社で、大型ドライバーとしてのスキルを高めていきたいと考えています」(同)

山野邊さんはもともとトラックドライバー・コンテストの存在については知っていたというが、より身近に感じたのは、同社の先輩ドライバーが数年前に全国大会に出場したことだったという。その後、コロナ禍に見舞われ、その影響を受けて全国大会の開催が中止になったこともあり、しばらくはトラックドライバー・コンテストのことを考える機会がなかった。しかし、コロナ禍が明けて再び全国大会が開催されるようになり、管理者から「山野邊さんもドライバー・コンテストに出場してみないか」と背中を押されたのを機に、出場を決意した。

「先輩ドライバーの中に全国大会出場経験者がいたこと、そしてその先輩ドライバーからドライバー・コンテストに出場する意義などについて教えていただいたこともあり、自分も出場し、自分のもつ技量を試してみたいと感じるようになりました」(同)

トラックドライバー・コンテストへの挑戦を決めた山野邊さんは、まずは「県大会優勝」という目標を立て、先輩ドライバーからの手厚いバックアップを受けながら、学科競技(法規、構造機能、運転常識)・実科競技(運転技能・点検)対策に取り組んだ。その結果、初めて出場した令和5年度の県大会で部門優勝を果たし、全国大会出場を決めた。

山野邊さんは引き続き、全国大会への対策を進めていった。特に、学科競技に関しては県大会と全国大会で出題内容が異なっていたこともあり、全日本トラック協会ホームページに掲載されている



山野邊 繁さん



運転の際には安全確認を徹底するとともに、安全性の高い運転操作を心がけている



乗務前点呼の際には写真を用いたKYT教育を実施し、事故防止への意識を高める



部門優勝を祝い社内を設置された横断幕。ドラコン出場は山野邊さんにとってかけがえのない経験となった

過去の学科試験を繰り返し解くとともに、時間があればテキストを読み、法規や構造機能、運転常識などへの理解を深めた。また、営業所では先輩ドライバー達も勉強を手伝ってくれた。しかし、山野邊さんは、全国各地からハイレベルな出場者が一堂に会し、プロドライバー日本一を目指して技量を競い合う全国大会に出場することへの不安がどうしても断ち切れなかったという。

山野邊さんは、令和5年10月21日・22日に開催された第55回全国大会に初出場したものの、入賞を果たすことはできなかった。山野邊さんは、表彰式で表彰台に上がっている入賞選手の姿を見て、「かっこいいな、自分も絶対に来年は表彰台に上がるぞ」と、次年度の全国大会に向けて闘志を燃やしたという。

全国大会の実施要綱では、出場資格として「既に各部門を通じて2回出場している者は出場することができない」と明記されており、山野邊さんにとっては令和6年度（第56回）全国大会が最後の挑戦の機会となる。山野邊さんは、苦手としていた学科競技への対策を強化し、年間を通じコツコツと勉強に励んだ。一方で、第55回全国大会に出場した時も実科競技には自信があったことから、バックスラローム走行などの実科競技対策にはさほど苦労しなかったという。

「再び全国大会に出場し、必ず結果を残す」との強い意気込みで6年度の県大会に挑んだ山野邊さんは、「県大会では絶対に負けられない」と大きなプレッシャーを感じていたものの、見事部門優勝を果たして2度目の全国大会出場を決めた。

山野邊さんは、都道府県トラック協会の地区大会を勝ち抜いてきた142人（うち女性28人）の精鋭ドライバーが参加した第56回全国大会に出場、見事11トン部門優勝の座を勝ち取ることができた。

「2度目の全国大会で部門優勝という結果が得られ、非常にうれ

しかった。ただ、今回が最後の挑戦となる私にとって、『自分が最高得点を獲得し、内閣総理大臣賞を受賞したかった』という思いも強く、その点に関しては本当に悔しかった。しかし、『やりきった』という満足感は大いにあります」(同)

山野邊さんは全国大会での部門優勝を機に、行く先々の日通グループの営業所などで多くの従業員から『おめでとう』との温かい言葉もらったという。また、山野邊さんの家族（父、母、姉）は全国大会当日に会場の自動車安全運転センター安全運転中央研修所（茨城県ひたちなか市）まで応援に駆け付けたほか、6年10月28日に開催された表彰式の終了後には家族からの電話があり、全国大会部門優勝という結果に非常に喜んでいただいたという。

常日頃から「無事故・無違反」を大事にしながら、乗務中の安全確認徹底を続けてきた山野邊さんは、ドライバー・コンテスト出場を通じて、事故防止への意識が一層高まったという。

「全国から集まった優秀なドライバーの方々と同じ目標に向かって競い合うことができたことは、本当に楽しく、自分にとって非常にいい刺激になりました。ドライバー・コンテストを経て、仕事への向き合い方が大きく変わったと感じています。来年度のドライバー・コンテストへの出場を検討している県内のドライバーの皆さんには、ぜひ出場を勧めたいと思います」(同)

最後に、山野邊さんに今後の夢や目標について伺った。

「全国大会出場を通じて結果を出すことができたので、今後はドライバー・コンテストに挑戦する楽しさを後輩ドライバーたちに伝えていきたいと考えています。今後も高い安全意識をもちながら、『引退するまで無事故』を目標に、ドライバーの仕事をしていきたいと考えています」(同)

■第56回全国大会 山野邊さんの挑戦を追う

第56回全国大会に臨んだ山野邊さんは、6年10月26日から27日にかけて学科競技と実科競技に挑んだ。

山野邊さんは学科競技が終わった瞬間に、上位入賞への自信を感じたという。

「2度目の全国大会では、学科試験の内容が非常に難しかったのですが、1年間勉強を積み重ねてきた甲斐があって、確かな手ごたえを感じることができました」(同)

また、実科競技では、バックスラローム走行のフィニッシュをきれいに決めることができた。「もしかしたら優勝できるかもしれない」、山野邊さんの強い自信は確信に変わったという。



2日目に行われた実科競技では、バックスラローム走行のフィニッシュをきれいに決めることができた

企業プロフィール

日通千葉貨物運送 株式会社

代表取締役社長 土岐 真仁
千葉県習志野市茜浜 3-7-1
従業員 473人（ドライバー28人）
台数 33台